



Teacher Soma の

英語のハナシ

第1回

「グローバル化」を中心に

はじめに

中・高生の皆さんこんにちは。今回から何回かにわたって「英語のハナシ」をします。皆さんは、それぞれの学校で英語を習っていますね。でも、どこの学校でも教科書に出てくる英語そのものを扱うのが時間的に精一杯で、英語という言語を俯瞰する（全体像を理解する）ことはなかなかできないのが現状だと思います。ですので、英語とはどんな言語であるのかを、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。英語を育んだ社会の歴史、文化や自然などを含め、さまざまな角度から英語を考えていきます。時には日本語と比較したり、他の言語を例に出したりします。もちろん英文法のハナシも出します。英文法は苦手だという人もたくさんいるでしょう。でも、もしかしたらこれを読んで英文法の面白みを見つけることができるかもしれません。

森羅万象はつながっている

日本に岡潔さん(1901-1978)という高名な数学者がいました。多変数複素関数論という分野の大問題を解決した世界の大数学者です。この先生は、物事が分かるには三つの段階があり、その最終段階の第三段階では、あらゆることにつながっていて、数学も俳諧も仏教も区別がないと言いました。ですので、氏の著書には、仏教の曹洞宗の道元禅師(1200-1253)や松尾芭蕉(1644-1694)や芥川龍之介(1892-1927)などのことがよく出てきます。その先生がキーワードにしているのは、「(響きあう)情緒」です。「情緒」とは、分かっているようで、あらためて説明しようとする、なかなかうまくできないものです。先生は、「例えば、早春の雪解けの小川の音を聞いて、ああいい音だなと思う。その時、人は自然と心が通い合っている。それを感じることができるのは情緒があるからだ」というような説明をします。情緒は心のものです。心は大変難しい存在です。誰でも心を持っていますが、自分の心が自分でよく分かっているわけではありません。そのような心に人は動かされます。

「やる気」も「嫌気」も「愛しく思う気持」も「逃げ出したくなる気持」もすべて心から生じます。

また、何事も「心構え」ができていれば、頑張りがきいたりします。このようなことは、皆さんも何かにつけ経験があると思います。岡先生は、数学の大問題を解くヒントは、存外、数学以外のところにあり、しかもそれに情緒という心の光が強く関係している、ということをお願いしたいのだと思います。先生の数学は「情緒の数学」とも言われています。何事においても、森羅万象（宇宙に存在するあらゆるもの）が互いにつながっているということを念頭において進むことは大切なことです。英語の分野も、もちろんそうです。私たちもこの点を大切にしていきたいものです。

「グローバル化」とは

さてみなさん、今や「グローバル化」の時代と言われています。よく耳にする「グローバル化」という日本語は、英語の‘globalization’の訳語です。この用語は、Harvard Business Schoolというアメリカの名門ハーバード大学の経営大学院で教えていたTheodore Levitt(1925-2006)という先生が、1983年に自身の論文の中で使った用語です（その論文のタイトルは、‘The Globalization of Markets’「市場のグローバル化」）。それ以前には、あまり見かけなかった語です。この語は今や世界中で使われています。日本では、訳しようがなかったので、カタカナでそのままに訳したわけです。1980年代というのは、日本では1960年代から始まったいわゆるバブル経済がはじけたときです。アメリカは1970年代に、ニクソンショック(Nixon shock)やオイルショック(Oil shock)などが起こり、やはり経済は行き詰まりました。アメリカはこの打開策として、新たな投資空間を求め「電子・金融空間」を開発した、というのが専門家（例えば、経済学者の水野和夫さん）の見方です。このコンピューターによる「電子・金融空間」で起こった現象がグローバル化です。

‘globe’という単語があります。ラテン語では‘globus’ですので、この語は、ラテン語からフランス語を通して英語に入ってきたと考えられます。本来、「球、球体」という意味です。研究社の「英語語源辞典」によれば、これが「地球」の意味で使われ始めたのは16世紀になっています。すなわち、ポーランドの天文学者コペルニクス(Copernicus)による地動説が出て、地球が球体であることが判明した時期です。地動説は、それまでの神中心のカトリックのキリスト教社会を支えていた天動説を覆し、地球が太陽を回る球体であるという概念を確立させました。この16世紀は、専門家により「長い16世紀」と言われ、ヨーロッパ世界が近代に入る世紀です。

‘globalization’は、動詞‘globalize’の名詞形です。‘globalize’をCambridge English Dictionary「ケンブリッジ英語辞典」で引くと、

‘to (make a company or system) spread or operate internationally’

と説明が出ています。



すなわち、直訳すれば、「(会社や組織)を国際的に拡大したり、営業(させたり)すること」の意味です。少し語の説明をします。‘make’は「～させる」の意味の使役動詞(causative)で、「make+目的語+動詞の原形」のパターンで使います。この‘make’は、中三から高一のテキストに出てきます。基本的には、「(強制的に)～させる」の意味を持ちます。同じ「～させる」でも、‘let’は、「(望むことを)させる」の意味です。したがって、

1 Let him do the job. 「彼にその仕事をやらせてあげなさい」

2 Make him do the job. 「彼にその仕事をさせなさい」

のように使い分けます。この‘make’は、皆さんにぜひ使えるようになっていただきたい動詞の一つです。

‘system’という名詞は、日本人には少しわかりにくい名詞です。この語はギリシャ語が語源で、その意味は、‘organized whole’すなわち、「組織体」の意味です。「組織」という分析的な語は、そもそも日本語の古いヤマト言葉にはありません。中国からの輸入漢字ですので、音読みだけしかありません。ギリシャ語では‘sústēma’です。このような語が古代ギリシャではすでに使われていたのですから、ギリシャ世界がいかに抽象的な世界を持っていたかが想像できます。

物体は大なり小なり組織化された構造を持っていますが、この語は人間が作った会社や制度などの組織や体系、それに人間の「(組織体としての)体」も意味することができます。‘subway system’と言えば、「地下鉄(網)」のことです。し、“The food is good for the system.”といえば、「その食べ物は体に良い」の意味です。

少し横道にそれました。もどります。‘globalization’の意味するところは、固く言えば、「地球化」ですが、意味するところは「人、モノ、お金が自由に国境を越えること」です。要するに、ビジネス用語です。皆さん、‘business’という語はわかりますね。これは、英語本来の語です。つまり、ギリシャ語やラテン語から英語に入ったものではありません。英語本来の語というのは、今日のイギリス人の主流をなすアングロ・サクソン族(Anglo-Saxon)の言語です。彼らはもともと北ドイツにいた民族で、4世紀ごろからブリテン島に侵入した民族です。「ゲルマン民族の大移動」と呼ばれ、世界史の教科書に出てくると思います。英語のおおもとは、彼らの言語です。今でも北ドイツの田舎に行けば、現在の英語に近い言葉が聞けるとのことが、どこかの本に出ていました。

まず、この語(business)は発音に注意が必要です。発音記号で書けば、[bɪznəs]ですので、「ビズネス」に近い発音です。‘busy’「忙しい」の名詞形の‘busyness’「忙しさ」は、[bɪzɪnəs]です。これは、「ビズネス」に近い音になります。インターネットに上がっている城西国際大学の瀧先生の論文によると、‘business’は、‘busi+ness’で、この‘busi’はサクソン語の‘bisi’から出ているとのことです。なるほど、これですと語頭の発音が[bɪ]になったことが理解できます。さらに瀧先生は、この語は本来「義務、公務」の意だったと述べています。とすれば、「商売、金儲け」の意味でつかわれ始めたのは、商活動が盛んになってからです。福沢諭吉は、‘business’を「職分」と訳したそうです。とにかく、本来的には「公益的な商活動」を意味した語であり、現代の「(なりふり構わない)金儲け」という意味ではなかったということになります。



‘globalization’が出てくる前は、‘internationalization’「国際化」という語がよくつかわれました。そして当時、日本では「国際」の二文字が盛んに高校や大学の名前に入りました。‘international’は‘inter’+‘national’なので、「国家間の」の意味です。‘inter’は「～間の」の意味のラテン語です。‘national’は、皆さん知っている‘nation’「国家」という語の形容詞形です。ただし、渡部昇一の「英語の語源（講談社現代新書）1977年」によると、‘nation’の語源は‘nature’で、この‘nature’はさかのぼれば、ギリシャ語の「（女性が子供を）生む」という語から出ています。「自然」の意味ではありません。語根（語の基本部分）は、*gn-/gnat-です。子供を産むのは女性ですので、古代ギリシャ語では、「女性」が‘gne’になっています。「グネ」です。‘genius’「天才」とか‘gene’「遺伝子」とか‘generation’「世代」とか、スペルに[gen]が入っている語はこの系列です。‘gentleman’もそうです。「生まれの良い人」のことです。

結局、‘internationalization’から‘globalization’の変化は、経済活動の市場がいくつかの国家間から地球全体に移ったことを示しています。そして、これを可能にしたのは、皆さんが使っているコンピューターの出現なのです。一つエピソードがあります。日本中で「国際化」が広く叫ばれていたとき、故安倍首相が「日本を国際化しないといけません」と言ったのをイギリス人が聞いて、「意味が分からない」と言ったそうです。つまり、「（日本という）国家を‘internationalize’する」という言い方は、英語にはないわけです。これまで述べたように、‘internationalize’は、「市場などを国際化する」の意味なわけです。「一国あるいは国民全体を国際化する」ことはありえないわけです。ついでですが、「国際化」とか「グローバル化」とか、猫の目のように変わるブームは、日本人に見られる現象だと司馬遼太郎さんが書いていました。日本人は「ブーム民族」だということです。この点もどこかで詳しく述べたいと思います。

「多様性」と「グローバル化」は相いれるのか



「多様性」も今日の社会のキーワードです。「多様性」は‘diversity’です。‘cultural diversity’「文化の多様性」とか、‘biological diversity’「生物の多様性」とか、‘ethnic diversity’「民族の多様性」のように使います。この「多様性」と「グローバル化」は互いに相いれないものであると指摘する人がいます。鈴木孝夫さん(1926-2021)です。

「日本の感性が世界を変える」という本を書いています。慶応大学の医学部を卒業してから、同大学の文学部英文学科に編入した人です。ですから、医師で英文学者であるという稀有（珍しい）な方です。医者をやめて文筆業に走った人といえば、何といっても島根県津和野出身の森鷗外(1862-1922)でしょう。鷗外は学校の国語の教科書に出てくるはずですが、夏目漱石より少し年上です。本名は森林太郎で、確か年齢を二つ三つ鯖読んで（ごまかして）東京帝国大学の医学部（さかのぼれば徳川幕府の医学所）に入った、と司馬遼太郎さんの本に書いてあったと記憶しています（どの本であったか今思い出せません。後で調べて出します）。軍医でした。年齢をごまかしても入学ができたのですから、いい時代でした。明治初期の大学は、入学はほぼフリーで、しかし卒業がとても厳しい本当の実力主義の時代でした。

さて、この鈴木先生は、「グローバル化」は「欧米化」、特に「アメリカ化」であると断言しています。多様性のある世界の文化を欧米型一色に染めていくのは、とても危険であると警鐘を鳴らしています。欧米型社会は膨大な化石エネルギーを消費する大量生産、大量消費、大量廃棄の社会であるからです。同書の中で先生は、アメリカのバッファローの絶滅作戦（中西部開拓時、特に鉄道の敷設の邪魔になるという理由で絶滅させようとした。6000万頭から1000頭程度に減少）やベトナム戦争の枯葉作戦（猛毒ダイオキシン系の薬剤を散布）に触れ、アメリカ社会がいかに自分達の間人社会の福祉や繁栄だけを考える度が過ぎた自己中心的社会であるかを述べ、世界がこの考え方に席卷（支配）されるのは、地球の生態系の持続的保全にとっては大問題になると言っています。

鈴木先生は、さらに言語の多様性についても述べています。現在、世界に存在するといわれる6000から7000くらい言語が英語一色に収斂（一つに集約される）するということは、人間の言語の多様性をなくすることにつながり、それは思考の多様性をなくすることを意味する、と言っています。多様であることは、地球上のすべての生き物が生き続けていくための必要不可欠な条件であることを強く述べています。

皆さんは、どう思いますか。鈴木先生は心配しすぎです、と思いますか。令和生まれの皆さんは、グローバル化の日本に生まれわけですから、スマホやAIといった道具になんの違和感もないでしょう。それはそれで当然のことです。もしかしたら、AIなどをもっと活用し、今よりもっともっと便利な社会にしなければならないと思っているかもしれませんね。しかし、例えば昭和初期の片田舎に生まれた私などは、コーヒーもテレビも冷蔵庫もない時代に生まれました（でも、不幸せだったとは思いません）。ですから、これ以上便利になったなら、一体どうなるのだろうか心配する鈴木先生の気持ちがよく分かります。しかし、人間はその時代その時代に適応して生きることが当たり前で、その時代の商品や機器を利用します。問題があるからといって、文明のすべてを拒絶して、山奥で世捨て人のように暮らすのは、普通人にはできません。これで大丈夫かと心配するのは、過去の時代に青春時代を送った年寄りだけなのかもしれません。でも、経験豊かな年配諸氏の言うことに耳を傾けることは大切です。

「グローバル化」と英語、そして「発想の転換」を！



私たちは、今、過去の日本人が楽しめなかった欧米化した生活を楽しんでいます。洋服を着、コーヒーや紅茶を飲み、牛肉を食べ、ハンバーガーやパスタを楽しむなど、欧米の食習慣を取り入れ、多様な生活を楽しんでいます。日本語にも多々横文字が入っていて、これをうまく使って楽しんでいます。これもグローバル化のおかげと思っている人は、私を含め、多くいると思います。しかし、このまま今のレベルでこれを続けるわけにはいかない、というのが専門家の見方です。13世紀からおよそ800年もやってきた、「よりはやく、より遠く、より効率よく」というやりかたを「よりゆっくりと、より近く、より寛大に」にしなければならない、と警告しています（水野さん）。そうすることで、人類が地球環境に与える悪影響を徐々に軽減していくことができます。皆さんにその責任があるわけではありません。責任は、これまで諸問題の解決を先送りにしてきた先輩諸氏にあります。しかし、これからの100年これをどうするかがとても大切です。もはや先延ばしできない段階に来ています。



発想の転換が必要でしょう。18～19世紀を生きたイギリスの詩人William Wordsworthは‘The Tables Turned’（直訳すれば、「ひっくり返ったテーブル」、平井正穂さんは「発想の転換を」と訳している）と題する詩の中で、

Enough of science and of art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.

訳（平井正穂）

「科学も学問ももう沢山、といたい。
それらの不毛の書物を閉じるがいい。
そして、外に出るのだ、万象を見、万象に感動する
心を抱いて、外にでるのだ。」



と歌っています。イギリスが「日の沈まぬ国」であったとき、Wordsworthはすでに先を見抜いています。そうです、ここにヒントがあります。これからはもっと自然を大切にしていかなければなりません。さらに、‘The rainbow’「虹」という詩の中では、“The child is father of the man:”「子供は大人の父」と言っています。子供は自然です。ここにもヒントがあります。

「グローバル化」を支える言語は英語です。周知のように、英語はもともとイギリスという日本より小さい島国の母国語です（日本はイギリスの約1.5倍）。このイギリスが、18世紀に産業革命を起こし、ヨーロッパ第一等の技術立国となり、覇権戦争でスペインを破りオランダを破り、ヨーロッパの覇権を手にし、破竹の勢いで世界支配に出ていきました。今のイギリスからは想像がつかないかもしれませんが、かつては、「七つの海を支配する国」などといわれました。実は、日本の明治政府は、東洋のイギリスになることを目指しました。時勢がオランダからイギリスに移ると、それまでお世話になったオランダからすぐにイギリスに転轍（線路を切り替える）するように乗り換えました。こういうのを難しい英語では‘ingrate’と言います。「恩知らず」のことです。黎明期の日本はなりふり構わないingrateでした。

ヨーロッパは、大雑把に言えば、イタリア→ポルトガル・スペイン→オランダ→イギリスという順で覇権(hegemony)のバトンが渡りました。このバトンは、話し合いで渡ったわけではありません。戦争に勝った方に回りました。したがって、ヨーロッパは何百年も戦争に次ぐ戦争だったわけです。イタリアが一番先になっています。イタリアは今のような統一国家になったのは19世紀です。それ以前は、いわゆる都市国家です。12世紀にはボローニャには、ヨーロッパ最古の大学ができています。

吉見俊哉の「大学とは何か（岩波新書）2011年」によれば、イタリアのボローニャ大学は1158年創設となっています。日本の時代でいえば、平安末期に近いです。法学部です。当時ボローニャに、著名な法学者が現れ、彼らから学ぼうとする学徒がヨーロッパ全土から集まってきたということです。これらの学徒は、いわばイタリアでは異邦人だったので、都市から保護されない存在でした。そこで彼らは、コンソルティアという相互扶助組織を作って自らを守りました。その組織では、出身地ごとにナチオ(nation)というグループ、いわば国民団を作りました。それぞれの



グループが代表者を選び、代表者による新たな団体ができました。これが大学団、すなわち‘university’となったとあります。‘Oxford’や‘Cambridge’を含め、15世紀までには、ヨーロッパに70~80校が作られたそうです。これが、ヨーロッパ全土の広域的な人の行き来を促し、物流を活発化し、知識を伝えることに貢献したわけです。日本では、ごぞんじ東京大学が江戸時代の蕃書調所(1856年)から様々な段階を経て、4学部の東京大学として独立するのは1877年です。ポローニャ大学とは、およそ700程度のひらきがあります。

ハナシがそれでした。とにかくそのくらいイタリア諸都市は早くに栄えています。中でもベネチア(Venice)共和国やジェノバ共和国は、東洋との貿易や、新大陸からの銀の通商路にあたり栄えています。ただし、新航路の発見により、16世紀末から17世紀にかけて衰えます。15世紀末には、大航海時代のポルトガルとスペインが登場してきます。ポルトガル商人やスペイン商人は王権の後ろ盾があり、国家的な事業として西アフリカの金や、アラビア商人の手を経ることなく直接に東方と貿易をする航路を探します。1493年には、形の上ではカトリックの伝道地域の分割ということでしたが、ローマ法王の勅書により、世界をポルトガルは東に、スペインは西にと分けました。これが、コロンブスやダ・ガマの新航路発見につながったわけです。

ポルトガルやスペインはラテン系のカトリックの国です。そもそも芸術には強いけれど、どんぶり勘定をするだけで、物事の細かな計算は苦手なはずで、戦争では、戦費の調達を何とかしなければなりません。結局、ポルトガルもスペインも、戦争の借金が返すことができなくなり、経済が破綻し敗北していきます。これに対し、オランダやイギリスは新教の国です。プロテスタント(Protestant)の新教は、商業資本の台頭とともに出てき宗教です。それまでのカトリック的な教会お任せのやり方では、商業はやっていけなかったのです。ものを質と量で測ることと、何といても自律した判断が必要になったからです。オランダやイギリスの新教の国が、今度はスペイン帝国を退けることになります。

オランダとイギリスもやがて覇権争いの戦争をします。イギリスはすでに国家の中央集権体制が出来上がって、うまく戦費の調達に成功したのですが、当時のオランダは連邦制で、戦費の調達がイギリスほどうまく行きませんでした。その差が結果に出たことになります。しかし、イギリスも植民地経営にも莫大な費用がかかり、いつまでもそんなことを続けられることができなくなります。やがてイギリス経済にも陰りが出始めます。インドをはじめとして、ぼろぼろと植民地を手放すことになり、今日のイギリスの姿があります。

漱石は、「草枕」のなかで、「世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所には、きっと影がさすと悟った。…」と言っています。そうです、「盛者必衰のことわり」のことです。強いものも必ずダメになる、という普遍的な真実のことです。覇権のバトンは、正にこのことを示しています。漱石は、20世紀初頭におよそ3年間イギリスに留学をしています。イギリスに影がさしてきはじめてころです。漱石はそれを見て取ったでしょう。



明治の日本は、なりふり構わず西欧に追いつこうとしました。そして、すべてをお金で解決しました。高い給料を払って、イギリスやアメリカから学者を雇いました。お雇い外国人です。例えば、北海道大学の前身である札幌農学校で教えた、“Boys, be ambitious.”で有名なWilliam Clarkや、東京の大森貝塚を発見したEdward Morseなどがいます。そして、日本からは留学生を送り出しました。夏目漱石もその一人です。漱石は、もしかしたら、日本のこのなりふり構わない努力を空しい努力と思っていたのかもしれませんが。いずれにせよ、この結果が、今日の日本国です。



イギリスの後は、周知のように、イギリス人が作った国であるアメリカにバトンがわたりました。アメリカ大陸には、モンゴル系のアメリカインディアンが先住民として住んでいました。北アメリカでも南アメリカでも、先住民はヨーロッパ人の手により悲惨な目にあわされました。今日のヨーロッパ文明は、先住民の犠牲の上に立っていると言えます。日本でもアイヌ民族が同じような目にあっています。中国では、現在、ウイグル族が支配民族の漢族から痛めつけられています。人間という動物は、まったく動物的で厄介な存在です。

17世紀初頭になるとイギリス人はアメリカに渡り始めました（1620年のThe Mayflower号の102人は有名。船長はオランダ人）。1929年にマサチューセッツ湾植民地に入った人々は、宗教的に厳しいだけでなく知的レベルの高い人たちでした。‘puritan’「清教徒」です。「もっと宗教（英国国教会）を‘purify’「純化せよ」と主張したわけです。渡った早々に（6年後）大学を建てました。それがHarvard大学です。‘Harvard’は、創設にあたりたくさんのお金を出した人の名前（John Harvard）です。慶応大学を「福沢大学」と呼ぶようなものです。日本はこの点、公私の区別がしっかりしていますので、そんなことにはならなかったのです。Harvard大学のモットーは‘veritas’です。ラテン語で「真理」の意味です。しかし、当時そのあたりには、いろいろなアメリカインディアンの民族が暮らしていたはず（‘Massachusetts’はそもそもインディアン語）。イギリス人は、その原住民の土地にかけてに侵入し、土地を奪って、大学を建てて「真理」をモットーしたわけです。インディアンにしてみれば、とんでもない「真理」です。「すみません」の一言もなかったでしょう。



イギリス人がアメリカに渡る100年も前からスペイン人をはじめとして、他のヨーロッパ人もアメリカに渡っていました。しかし、最終的には、ヨーロッパ本国の海軍力の差で、イギリスがアメリカを全部手に入れることができたわけです。このマサチューセッツへの入植からおよそ一世紀半、アメリカは本国イギリスから独立しました。ついでですが、日本の海軍はイギリス海軍に習っています。

偶然と言ってしまうえば、偶然ですが、18→19→20世紀と覇権のバトンは英語を母国語とするイギリスとアメリカに回りました。それにより、今日英語が世界の共通語として使われているわけです。ビジネス、メディア、学術をはじめ、あらゆる分野で英語が使われています。皆さんもやはり英語を使えるようになったらいいなと思いませんか。英語はビジネスや学術をはじめとして、世界を知り、世界に発信するための重要な道具になっています。

かつて日本では、高校や大学を出ても英語が話せるようにならないと、学校の英語教育が批判されました。しかしそれは当たり前のことです。日本の英語教育は、西洋文明に追い付くためのものでした。西洋人とcommunicationするためのものではなかったのです。追い付き、追い越すための知識を読み取る英語学習でした。



ですので、英文法と訳読が主になったのです。一応それに成功し、今日の技術立国の日本が出来上がったわけです。日本の英語教育が失敗したわけではありません。しかし、今や日本も先進国の一つとして、発信をしなければなりません。これに合わせて‘communication’の時代の英語教育にシフトしつつあります。しかし、すんなりとはいかないはずで、言語が全く別物です。ドイツの高校生が英語を学ぶように楽にはいきません。この点については、今後のハナシに出します。

さて、「諸行無常」です。アメリカの時代も2070年までと読んでいる学者がいます。イタリアの歴史家ジョヴァンニ・アリギ(Giovanni Arrighi,1937-2009)です。2050年には、アメリカの白人の人口が、非白人の民族の人口より少なくなるとの見通しです。中世以来、およそ800年をかけて作り上げた現在の世界体制の頂点に立つアメリカですが、もはや打つ手に窮する時が来た、ということなのでしょう。アメリカの次にどこにバトンが行くのか、そもそもバトンが行く国があるのかないのか、バトン自体が必要かどうかです。

すでに述べたように、資本主義のはじまりを13世紀とすると、およそ800年の時が流れました。もはや、資本の投資空間がなくなったのです。800年も同じシステムでやってきたわけですから、今や飽和状態です。利子率を見ればそれが分かります。利子率は、2%切ると資本側が得るものがゼロになると言われています。日本は、もう20年近くこの状態です（2024年の10年ものの国債の利率は0.859）。

ここまで話してくると、皆さん、分かりますね。もはや、日本は頂点に達した国であることが。これからは、頂上を目指す登山ではなく、ふもとの自然を散策する登山でなければならないのです。アリギ先生の説が正しいかどうか、私にはどう転んでも見るのが不可能ですが、皆さんは自分の目で見ることができます。

以上、英語が世界の言語になっている所以（理由）について、長々と話してしまいました。なんだか世界史の授業のようになったかもしれません。第一回はこのくらいにしておきます。第二回は、もっと英語についてのハナシを出します。

最後に一句

「ゆく夏の 開志の森に 若きかんばせ」

参考文献

- ・岡 潔 「情緒と日本人（PHP文庫）2015年」「春宵十話（毎日新聞社）1963年」
- ・寺澤芳雄 編集 「英語語源辞典（研究者）1997年」
- ・鈴木孝夫 「日本の感性が世界を変える（新潮選書）2014年」
- ・水野和夫 「資本主義の終焉と歴史の危機（集英社新書）2014年」
- ・渡部昇一 「英語の語源（講談社現代新書）1977年」
- ・吉見俊哉 「大学とは何か（岩波新書）2011年」
- ・平井正穂 編集 「イギリス名詩選（岩波書店）1991年」